６月１３日
何もかも捨てて
ルカ福音書５章１～１１節

5:1　群衆がイエスに押し迫るようにして神のことばを聞いたとき、イエスはゲネサレ湖の岸べに立っておられたが、

5:2 岸べに小舟が二そうあるのをご覧になった。漁師たちは、その舟から降りて網を洗っていた。

5:3 イエスは、そのうちの一つの、シモンの持ち舟に乗り、陸から少し漕ぎ出すように頼まれた。そしてイエスはすわって、舟から群衆を教えられた。

5:4 話が終わると、シモンに、「深みに漕ぎ出して、網をおろして魚をとりなさい」と言われた。
5:5 するとシモンが答えて言った。「先生。私たちは、夜通し働きましたが、何一つとれませんでした。でもおことばどおり、網をおろしてみましょう。」
5:6 そして、そのとおりにすると、たくさんの魚が入り、網は破れそうになった。

5:7 そこで別の舟にいた仲間の者たちに合図をして、助けに来てくれるように頼んだ。彼らがやって来て、そして魚を両方の舟いっぱいに上げたところ、二そうとも沈みそうになった。

5:8 これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから」と言った。

5:9 それは、大漁のため、彼もいっしょにいたみなの者も、ひどく驚いたからである。

5:10 シモンの仲間であったゼベダイの子ヤコブやヨハネも同じであった。イエスはシモンにこう言われた。「こわがらなくてもよい。これから後、あなたは人間をとるようになるのです。」

5:11 彼らは、舟を陸に着けると、何もかも捨てて、イエスに従った。

今、アブラハムの生涯と信仰を
学んでいます。
今日は新約聖書から
アブラハムと同じ信仰を歩んだ人の
歩みを学んで行きます。

アブラハムは

１、神様の御声を聞いた

２，神様に従って生まれ故郷を離れた

３，父の家を出た

４，信仰によって導かれるところに進んだ

５，御心の地で祭壇を築いた

６、そこで天幕を張って、生活をした

これは私たちの信仰の歩みと同じです。

１，出会い。何かのきっかけで教会へ行き、聖書を読み、神様のことを考える。

２，３、神様を信じ受け入れ、今まで自分を縛っていた世の考え、家庭の価値観から離れる。

４，５、自分の力ではできないので、祈りつつ、信仰に導かれた生活をする。

このような信仰の歩みを
信仰の父と呼ばれるアブラハムに
習って行きたいと思います。
また今日は、同じような信仰の道を
歩み始めている
ペテロの歩み、体験を学びましょう。

ペテロとイエス様の出会い。

神様がアブラハムに声をかけられたように
イエス様はペテロに声をかけられた。
私たちもイエス様から
教会へ来なさい
聖書を読みなさい
信じなさい
と声をかけられています。

ペテロとイエス様との出会い

1:41　彼（アンデレ）はまず自分の兄弟シモンを見つけて、「私たちはメシヤ（訳して言えば、キリスト）に会った。」と言った。

1:42　彼はシモンをイエスのもとに連れて来た。イエスはシモンに目を留めて言われた。「あなたはヨハネの子シモンです。あなたをケパ（訳すとペテロ）と呼ぶことにします。」

ヨハネ１章４１節

イエス様に声をかけられたペテロは
この時イエス様について行きました。
イエス様はヨハネの子シモンを
ケパ、ペテロ、岩と呼びかけられました。
でもまだまだペテロは名前だけが堅固な
岩でしたが
性格、人格、信仰の中身は
軟弱、未熟でした。
でも信仰の一歩を踏み出しました。

ペテロは最初は自分の仕事、
生活をしながらイエス様に
ついて行きました。
船に乗ってガリラヤ湖で漁をしながら
カペナウムの家で奥様や奥様のお母様と
一緒に暮らしてメシヤ、イエス様に
ついて行きました。

ある日一晩中、ガリラヤ湖で漁をしましたが魚いっぴきも捕らえられない不漁の日でした。がっかりしているペテロの船を借りて、イエス様は船からお話をされました。お話が終わって、深みに漕ぎ出して、網をおろして魚を捕まえなさい、とイエス様はペテロに言われました。

この時不思議な大漁を経験して、ペテロは何もかにも捨ててイエス様に従って弟子として信仰の旅路に出発しました。

アブラハムが神様の御声を聞いたのは
カルデヤのウルの地、そこからすぐに
カナンの地にはいきませんでした。まず途中のハランまで行き、そこでお父様がなくなるまで暮らしました。父テラが死んで
身軽になって、ロトを連れ、すべての財産を携えてカナンの地にやって来ました。
先ず先祖の土地や父の家との
分離をしました。
そこで祭壇を築いて主を礼拝する生活をしました。

アブラハムはその後ネゲブに行き、飢饉にあってエジプトへ行き、そこで大きな失敗をしています。

信仰の旅は、祭壇を築いて礼拝し、天幕を張って生活して、主から訓練を受けて成長していきます。

ペテロは不思議な大漁を経験して
すべてを捨ててイエス様に従い、
信仰の旅、天国を目指す人生の旅を出発しました。
ペテロが捨てたものは
網や船、親や漁師仲間。
漁師としてのプライド、
漁師しかできないという自意識。
これらを捨てて救い主のお手伝いをする
使徒の道を歩み始めました。

ペテロはイエス様の後に従い、
失敗しては悔い改め、
祈りの祭壇、献身の祭壇を築きつつ
弟子の道を歩みました。
いろんな失敗を繰り返しました。
育った環境からくる失敗、
生まれ持った性格からくる失敗も
たくさんありました。

マルコ4章には
ペテロたち弟子はイエス様から
種まきのたとえ、神の国のお話を聴いて
とても恵まれて船で向こう岸へ
行こうとしました。
ところが突風が吹いて来て船が水をかぶり沈みそうになると
先生、私たちが死んでもかまわないのですか、と悪態をついています。

マタイ１４章では

弟子たちは船で向こう岸に行こうとしていましたが深夜になり向かい風でこぎあぐねていました。イエスが暗闇の中湖上を歩いて近づいて来られました。弟子たちは幽霊と思いましたがイエス様は声をかけてくださいました。ペテロは私も水上を歩かせてくださいと頼み、湖の上を歩き始めましたが、風を見て恐ろしくなり、沈みかけ主よ助けえてください、と叫んでいます。

お母さんたちが手を置いてお祈りをしてほしいと子供たちをイエス様のところに連れて来た時、ペテロたちは叱っています。

これに対してイエス様は怒って

子供たちが来るのを妨げてはならないと言われました。

ペテロたち弟子は何度も何度も
失敗を重ねながら
イエス様の後を歩み信仰の道を
歩んでいました。
失敗してイエス様に叱られては
悔い改めて祈りの祭壇を築き、
成長していきました。

失敗の旅を歩みながら、
古い自分を離れて
あたらしい弟子に変えられて行きました。
漁師としての自慢や誇りがつぶされて、その誇りから解放されて行きました。

やがてペテロや使徒たちは教会という天幕で暮らすことになります。
教会にはペテロたちガリラヤの元漁師、
ニコデモ、アリマタヤのヨセフのような
エルサレムの地位のある学者、
パウロのような元迫害者。
ユダヤの律法に熱心な割礼派、
異邦人からクリスチャンになった人々。
教会にはさらに奴隷階級の人やローマの軍人も加わって行きます。

一つの教会、一つの家族となり、
教会が愛によって、
一つの天幕生活をするためには、
それぞれ
生まれ故郷、父の家を、古い価値観、生活習慣を離れなければなりません。

過去と分離するだけでなく、祭壇を築くことは羊を全焼のいけにえとしてささげるように自分自身をささげることであります。

プライドをささげる。お金持ちのプライド、身分の高いプライド、高学歴のプライドも捨てて十字架につける時に、私たちが生かされてきます。

また劣等感も、過去の失敗敗北感もささげ、心の中から一掃して、焼き尽くしていただくことです。

パウロは古い自分との分離を十字架で説明しています。

6:14 しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。

ガラテヤ6章１４節

ペテロは無学であっても、過去に失敗があっても、そこから分離して、人間的な評価をささげ、焼き尽くして、使徒として、教会のリーダーとして奉仕しました。

ペテロ、パウロたちは伝道旅行をして
各地に教会が生まれました。
ちょうどアブラハムが天幕を張って
定住したように、各地に
天幕なる教会が生まれました。
天幕の共同生活には問題もあります。
ヘブル語を話す人々とギリシャ語を話す人々との間で給食の分配で
問題が起こっています。

食べ物のことでも問題が起こっています。

豚肉を食べなかった人々と、食物にこだわりのない人との間に問題が起こっています。

神様はアブラハムに地のすべての部族はアブラハムによって祝福されると約束されています。

祝福の天幕、教会という天幕には世界のあらゆる人々が入ってきます。

祝福され、他者を祝福する器となるため。

愛による平和、一致が必要。

パウロは過去との分離を
古い服を脱ぎ、新しい服を着た
譬えで説明しています。

パウロはコロサイ３章で
古い人をその行いと一緒に脱ぎ捨てて、
あたらし人を着たと表現しています。
あたらしい人は、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、
真の知識に至るのです。

私たちはキリストをその身に
着ているのです。
先祖代々の古い習慣から切り離され、
あたらしくキリストに連なって
他者を祝福する器になる。
究極の祝福は主にある救い、
神様の子とされることであります。
私たちの証しが、種まきが、主にある救いという
祝福につながっていくように
主に連なって行きましょう

祈り